經濟論叢

第119巻　第4·5号

マクロ均衡と期待……瀬地山　敏　1

ホッブズの初期論説「トゥキュディデースの生涯と歴史」について……田中秀夫　20

資本制生産様式と人間自然・土地自然との関係……梅垣邦胤　41

純粋消費ローンモデルと世代間所得再分配……矢野秀利　60

独占資本主義下の恐慌（循環）の問題……渕上勇次郎　74

昭和52年4·5月

京都大學經濟學會

独占資本主義下の恐慌（循環）の問題

——古川哲氏の所説によせて——

渕　上　勇　次　郎

I　ま　え　お　き

(1)　第2次大戦後の資本主義は，その内外諸矛盾の尖鋭化に伴う全般的危機の段階的な深化に反するかの如く，世界市場恐慌の急性的な激発を経験せず比較的急速な経済発展を実現して来た。しかし1970年代の幕開け以降，特にＯＰＥＣ諸国の石油価格引上げに触発された73—75年恐慌の勃発を画期に，主要資本主義諸国は，驚異的な高度成長期から陰うつな長期的沈滞期へと暗転し，新たな全般的危機の段階へ移行したかに見える。

従来，戦後資本主義の高度成長期の特異な循環的発展をめぐり，マルクス主義恐慌論の立場から積極的な理論的究明が試みられ，恐慌（循環）の現実的な発現と推移に対応しつつ一連の論争が展開されて来た[1]。だが今日なお，現代恐慌（循環）に関する統一的な見解は存在していない。このことは73—75年恐慌に対する各論者各様の理論的評価を見ても明白であろう。すなわち今次恐慌の性格規定においても「循環性恐慌」説をはじめ「インフレ恐慌」説，「安定恐慌」説あるいは「政策不況」説，さらには「非循環的＝構造的不況」説など[2]が複雑に入り乱れており，それ故にまた資本主義体制の今後の歴史的推移についても意見の一致を見るに至っていない。とは言え他面では，長期化した今次

1)　戦後恐慌（循環）論争史の概要については，林直道「国際通貨危機と世界恐慌」1972年の第2編，川鍋正敏，「戦後恐慌」の新しい視角，「エコノミスト」臨時増刊1973年11月17日号，など参照。

2)　この点の詳細は，桑野仁，どうみる1976年の世界経済，「経済」1976年3月号，小松善雄，現代恐慌と恐慌＝循環論争，「経済評論」1976年4月号，今井則義，循環性恐慌論の検討，「現代の理論」1976年6月号，など参照。

恐慌の深刻性を反映するかの如く，各論者たちの間に資本主義体制の歴史的な構造的危機の側面を多かれ少なかれ重視するという，いわば一定の共通な方法的意識が生じて来ているように思われる[3]。

この小稿は，現代国家独占資本主義下の恐慌・産業循環の分析を意図したものではないが，しかしそのための第一歩として，独占資本主義段階の恐慌（循環）は如何に捉えられるべきかについて若干の方法的考察を行なおうとするものである。われわれは，独占段階の経済循環を逸早く，資本主義の全般的危機の段階的深化と結び付けて把握する観点から，注目すべき問題提起を行なっていると考えられる古川哲氏の所説[4]を検討してゆく中で，この課題に取り組んでみたいと思う。

(2) そこで本論に入るに先立って，古川氏の所説の特徴的な理論構成を簡単に概観しておこう。

①古川氏は，「独占＝帝国主義段階における循環と恐慌の形態変化の視点から，現代資本主義のもとでの循環と恐慌の運動」[5] の特殊性を捉えようとされる。それは，産業資本主義段階と独占資本主義段階とは「異なった運動の段階的本質規定をもち，異なった運動の形態的特徴規定を持」[6] っており，独占段階では「資本主義の基本的矛盾は，主要矛盾たる競争と独占の矛盾に媒介されてのみ運動諸形態を展開しうる。」[6] と考えられるからである。それ故に，独占段階での「産業循環の分析は，この段階において資本主義の決定的法則となるにいたった『資本主義の不均等発展の法則』の基盤のうえでの変質と変形の激化傾向としてとらえられる視角が必要となる。」[7] とされる。

3) 例えば，今次恐慌を「循環性恐慌」と規定する諸家と言えども資本主義の体制的危機要素を指摘する。桑野，同上の他，佐藤定幸，世界経済の現局面について，「経済」1975年２月号，参照のこと。また，「世界的同時不況」＝「政策不況」と規定される大島雄一氏の場合は，「産業循環論の適用によって世界恐慌と規定することは誤解を生ずる」とし「構造論的視角」から「20世紀末大不況期」の到来を主張される，同氏，20世紀末大不況の歴史的性格，「エコノミスト」臨時増刊1976年３月１日号。

4) 古川哲「危機における資本主義の構造と産業循環」1970年。

5) 同上，93ページ。

6) 同上，13ページ。

7) 同上，139ページ。

②こうして「独占段階に共通な恐慌法則の明確化なしに，特殊戦後に限定された恐慌分析の理論化はありえないという方法的視点」[8] から検出される独占段階に「共通な恐慌法則」とは，この段階の「主要矛盾」に基づく「不均等発展の法則の基盤上」に展開し不可避的に発現する産業循環の継起的局面交替の「不明瞭化」，循環周期の短縮化，世界恐慌の「分裂化」[9] などの「傾向的法則」である。

③だが古川氏は，単なる形態変化論に留まらず新たに「体制解体＝危機循環」[10] なる独自な「概念」を構築される。この「体制解体＝危機循環」は，独占段階一般における資本主義的諸矛盾の運動とその資本主義的解決様式の特殊性を表示し，独占段階に特徴的な恐慌（循環）の発現機構を「資本主義の全般的危機論の見地と結びつけて」[11] 把握する総括的な「概念」である。氏はこの「概念」のもとに，独占段階の三つの歴史的時期―古典的帝国主義段階・全般的危機の第1段階・その第2段階に分けられた各時期の恐慌（循環）の形態変化の「特質とその歴史的位置づけ」[11] を究明される。

この小論では，以上の如き，「独占＝帝国主義段階の経済循環理論は，一方で『循環論』でなければならぬと同時に，他方ですぐれて『危機論』でなければならず，独占の支配が進展すればするほど，ますます『体制危機論』として展開されねばならない」[12] とする古川氏の所説の核心を成す諸論点，すなわち①独占資本主義の段階規定，②恐慌（循環）の形態変化の定式化，③そして「体制解体＝危機循環」なる「概念」について[13]，順を追って考察してゆく。なお，本稿の問題意識は，古川氏の中心的主張が独占（原理）の発展により恐慌のも

8) 同上，39ページ。
9) 世界恐慌の「分裂化」とは，「古典的統一的世界市場恐慌の喪失」（同上，72ページ）を意味している。
10) 古川哲，前掲書，まえがき，iii ページ。
11) 同上，i ページ。
12) 同上，107ページ。
13) なお古川氏の著書は「戦後日本資本主義の特質」の分析にまで及んでいるが，ここでは「帝国主義段階の産業循環をどうとらえるか」（1ページ）についての氏の所説の考察に限定されている。この点，お断わりしておきたい。

つ資本主義経済の矛盾の自己解決機能が妨げられ，帝国主義世界戦争と資本主義の全般的危機が生じるとして「体制解体＝危機循環」なる「概念」を構成される点に存するとすれば，これに対して，独占（原理）の強化は他面で競争（原理）の作用を伴い，むしろ新たな発展のための物質的諸条件を言わば経済内的に創出しうると見るべきであり，従って，全般的危機下においても危機の促迫要因としての恐慌の歴史的意義は決して軽視出来ないのではないかという点にある。

II　独占資本主義の段階規定について

(1)　まず，古川氏の所説の理論的礎石を成す独占資本主義の段階規定から見てゆく。

氏は，資本主義の「古典段階とは，体制矛盾とその運動条件にかんする普遍規定（資本主義の基本矛盾—引用者）から，歴史段階的な運動構造条件の基本規定（自由競争原理—同前）を直接に導き出しうるような，このかぎりで矛盾の一般的原理規定（氏の言う普遍矛盾—同前）＝矛盾の段階的運動規定（氏の言う主要矛盾—同前）という一致が保証されているものであった。」[14] では以上の如き「矛盾の基本規定（普遍矛盾—同前）とその運動展開の諸条件（主要矛盾—同前）は独占段階においてどのようになるであろうか。」[15] と問題を提起し，次の如く述べられる。

「独占＝帝国主義段階とは，まさにレーニンが特徴づけたように独占が競争と相並んで存在する特殊な歴史的段階である。」[15]

この場合，「競争と独占とは相対立する二つの原理として，たえず闘争し，この二つの原理の力関係は『流動』し『曲折的移転』をなしうるものとして独自の相剋をつくりだす。」[16] 独占段階では「本質的には，すでに自由競争は形骸化され，独占原理が優勢である。すなわち，自由競争原理への独占原理の闘争と優位は常時的・絶対的で

14)　古川哲，前掲書，10ページ，傍点—著者。
15)　同上，12ページ。

あり，二つの原理間の均衡ないし自由競争原理の噴出は相対的＝条件的かつ一時的なものである。」[16]従って「独占段階をまさに独占段階たらしめる主要矛盾は，けっして普遍矛盾たる基本的矛盾ではなく，競争と独占の間の矛盾であり，まさにこの矛盾こそが，段階としての本質規定をなす」[16]のである，と。

さて，このように独占資本主義の段階規定を明確化することは，大筋から言えば確かに独占段階に特徴的な恐慌（循環）の発現形態を捉える上での必要な前提であろう。それは，氏の主張される如く「競争の『窮極的』貫徹の点のみを特殊に強調して分析を終れりとすることは古典派的＝保守派的一面化となると同時に，独占支配貫徹の『優勢』と『恒常性』＝『絶対性』の点のみを特殊に強調して分析を終れりとすることは資本主義完全変質論・変形論としての一面化となる。」[17]という両極端の誤りを予め方法的に排除しうると考えられるからである。しかし古川氏の議論には若干の問題点も含まれている。

ただ，レーニンが，独占資本主義を「競争の完全な自由から完全な社会化への過渡的な，ある新しい社会秩序」[18]「自由競争と独占との混合物とでもいうような，なにか過渡的なものの明白な特徴をもつ，新しい資本主義」[19]と規定し更にまた「競争と独占という，たがいに矛盾する『原則』を結合しているということ，このことこそ帝国主義の本質であり，このことこそ崩壊すなわち社会主義革命を準備するものである。」[20]と論じたように，独占資本主義の本質的な特徴＝「段階としての本質規定」を，氏のいわゆる「主要矛盾」[21]＝「競争と独占の矛盾」に見出すことは正しいし見なければならない。だがこの「矛盾」を，

16) 同上，13ページ，傍点―引用者。
17) 同上，14-15ページ，傍点―著者。
18) 「レーニン全集」第22巻，236ページ。
19) 同上，252ページ。
20) 「レーニン全集」第24巻，493ページ。
21) この「段階としての本質規定」をなす矛盾は，いわゆる「主要矛盾」ではなくむしろ「特殊矛盾」であると言うべきではなかろうか。「主要矛盾」は「副次矛盾」の重要な対概念ではあろうが，独占段階の本質を規定する「競争と独占の矛盾」は，資本主義の基本矛盾＝「普遍矛盾」に対する「特殊矛盾」である，と言われるべきではなかろうか。すなわち，独占資本主義をかかる「特殊矛盾」に画される資本主義の特殊な歴史的発展段階として，またこの「特殊矛盾」は独占段階から見ればこの段階の本質を規定する「基本矛盾」として捉えるほうがより論理的に思われる。

競争と独占なる相対立する二「原理」間の絶えざる闘争において把握するだけでなく，「自由競争原理の闘争と優位は常時的・絶対的であり，二つの原理間の均衡ないし自由競争原理の噴出は相対的＝条件的かつ一時的なもの」として捉えるのは，決して正確ではない。なる程「独占原理」の「自由競争原理」への「闘争と優位」が「常時的・絶対的」である点に関しては，レーニンも「純一の帝国主義」[22] を唱道するブハーリンを批判し「帝国主義と金融資本主義は，古い資本主義のうえに立つ上部構造である。それの上層を破壊するなら，古い資本主義が現われるであろう。」[22] と述べている。しかし，だからと言って「自由競争原理」が「一時的・相対的」にしろ「独占原理」を押し退けて「噴出」したり後者と「均衡」する訳ではない。自由競争は「資本主義と商品生産一般との基本的特質」[23]・「資本の内的本性」[24]・「資本の本質的な規定」[24] である以上独占段階に至っても消滅しないが，資本主義の言わば基軸的な「原理」としては「独占原理」（他方に必ず「競争原理」を伴う）と歴史的に交替し独占資本主義の「広大な基層」[25]，独占支配の「一般的なわく」[26] となって「形骸化」するのである。にも拘わらず敢えて「自由競争原理」の「一時的・相対的」な「噴出」を説き，しかも他面で「少数の独占者のその他の住民にたいする抑圧」[26] を倍加する独占相互の独占的高利潤の獲得をめぐる激しい抗争，「支配関係，またそれと関連する強制の関係」[27] を典型とする独占の非独占の絞めころし，更に非独占相互の対立を含む独占段階に本質的な「競争（原理）」を，独占（原理）と交替した「自由競争（原理）」に余りに矮小化するなら，逆に「競争（自由競争を包含）と独占の矛盾」の内容も結局は「独占原理」の「競争原理」に対する「闘争と優位」の「常時性・絶対性」としてのみ理解されることになろう。事

22）「レーニン全集」第29巻，155ページ。
23）「レーニン全集」第22巻，306ページ。
24）K. Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, S. 317, 高木幸二郎監訳「経済学批判要綱」第2分冊1959年，342ページ，傍点—原文。
25）「レーニン全集」第29巻，156ページ。
26）「レーニン全集」第22巻，236ページ。
27）同上，238ページ。

実古川氏は「競争原理の作用がますます一時的なものになり，ますます部分的なものとなり，ますます形骸化」[28]するものとなる，と言われている。だが，ここからは「恐慌と循環運動の本来的性質と本来的形式からの変質と変形」[29]と言うより資本主義に「本来的」な恐慌（循環）それ自体の軽微化・消失化傾向が一面的に帰結されるおそれなしとしない。「競争と独占の矛盾」に着眼する場合，やはりレーニンが力説した如く「帝国主義は資本主義を上から下まで改造するものではなく……交換，市場，競争，恐慌等々を排除することは，帝国主義にはできない。」[30]という点を，まずは明確に確認しておくべきである。この点を曖昧にしておくことは，後にみるように帝国主義世界戦争，「体制解体＝危機」に循環的運動を解消しその独自性を否定することにつながってしまう。

(2) ともあれ，独占資本主義の特殊歴史的な段階的本質を「競争と独占の矛盾」に見出された古川氏は，独占段階に「共通な恐慌法則」・「循環の変質・変形」を究明する方法的視座について更に次の如く言われる。

独占「段階では，資本主義の基本的矛盾（生産の社会的性格と取得の私的資本主義的性格との矛盾—引用者）は，主要矛盾（特殊矛盾—同前）たる競争と独占の矛盾に媒介されてのみ運動諸形態を展開しうる。いまや，基本矛盾とそこから直接導かれる内在矛盾（生産の無制限的拡大傾向と本来制限されている個人的消費の限界との矛盾＝「生産と消費の矛盾」—同前）→恐慌の規定なる系列に新しい競争と独占の矛盾が重層的に加わり」[31]，これは「当然資本主義の基本的矛盾の現実的展開として運動が行なわれる産業循環と恐慌の展開に重大な変化をもたら」[32]す。かくて競争と独占なる「二要因の対抗・相互作用のうちに運動展開を把握しなければならず，そのなかで循環的発展の『古典型』からの変形を語らねばならない」[33]のであり，恐慌（循環）

28) 古川哲，前掲書，106ページ。
29) 同上，105ページ。
30) 「レーニン全集」第24巻，492ページ，傍点—原文。
31) 古川哲，前掲書，13ページ。
32) 同上，38ページ。
33) 同上，103ページ。

の発現態様は，独占段階に至って「決定的法則となるにいたった『資本主義の不均等発展の法則』の基盤のうえでの変質と変形の激化傾向としてとらえられ」[34]ねばならぬ，と。

以上，いずれも極めて抽象的に表現された難解な文章ではあるが，約言すれば，独占段階では資本主義の基本矛盾の展開過程に「競争と独占の矛盾」が「重層的」に加わる，この段階の「恐慌（循環）の法則」は後者の矛盾の故に激成する「不均等発展の法則」に基づいて把握されるべきである，となろう。これは，重要な方法的視角と思われる。この点については，レーニンの次の如き衆知の示唆が想起される。すなわちレーニンは，ブルジョア経済学者たちの「カルテルによる恐慌の排除という」[35]おとぎ話を批判し「いくつかの工業部門で形成されつつある独占は，総体としての全資本主義的生産に固有の混沌状態をつよめ激化させている。」[35]「しかも同時に，技術の非常に急速な発達は，国民経済の種々の部面の不均衡と，混沌状態と，恐慌との要素を，ますます伴う。」[36]と指摘した。独占支配の形成と発展は，「競争原理」を除去せず却って生産の無政府性や不均等性，恐慌の要素を激化させる訳である。しかし，独占段階に特殊な矛盾＝「競争と独占の矛盾」の展開を「不均等発展の法則」として把握するにしても，勿論かかる「法則」そのものは資本主義的生産における発展の不均等性の具体的な作用形態を何ら規定していない。それ故「不均等発展の法則」の貫徹形態は具体的に規定される必要がある。換言すれば，資本主義の基本矛盾の独占段階での発展過程を理論的に究明せねばならない。これは「独占段階にその特殊性を与える運動法則の概括的認識」[37]の問題である。しかし「マルクス経済学の過去における蓄積は，いまだ独占段階での上向における媒介諸契機の態様を豊富かつ整然と明らかにしえていない」[37]と言える。そこで次節では，古川氏による問題の解明と恐慌（循環）の形態変化の定式化を

34) 同上，139ページ，傍点—引用者。
35) 「レーニン全集」第22巻，239ページ，傍点—原文。
36) 同上，240ページ。
37) 古川哲，前掲書，18ページ。

考察する。

III 恐慌（循環）の形態変化について

(1) さて古川氏は，以下に見る如く，独占段階での「資本蓄積・生産力発展の態様と，対応する市場構造変化の基本条件」[38] を分析しつつ「不均等発展の法則」の「具体的な運動形態」[39] を明らかにされ，そこから独占段階に特徴的な「恐慌（循環）の法則」を説かれる。

①「不均等発展の法則」の具体的な貫徹姿態について。まず「同一産業部門内」において，資本蓄積と生産力は，ひと度「ほとんど時を同じくしての激烈な投資競争」[40]＝「巨人同士の闘争」[40]が一挙的に展開するや爆発的な膨張を遂げるが，その結果ある特定部門では「独占的企業の比重の増大」[41] と「大幅な生産能力の過剰化」[41]が生じ一転して「重苦しい停滞の持続」[41]傾向と必然的に交替するとして，ここに「同一産業部門内での『発展』と『停滞』との時期的配分と交替の法則」[42] を定式化される。だが「独占的投資競争と独占による部門制覇が完了した……その部門では」[43]「独占は，その厖大な独占的超過利潤の集積にもかかわらず……有利な投資場所を見出すことができない。」[44]ので「他の独占化のよりおくれた産業部門に……侵入し，そこで新たな独占的投資競争を激しくくりひろげる」[44]とし，この関係を「異種産業部門相互間での『発展』と『停滞』との並存（部門別配分）と交替の法則」[45]と規定される。これらは「不均等発展の法則」の言わば国内的貫徹姿態であるが，こうして「国内の各産業部門を征服し，また新設産業部門を併呑した独占は……海外に資本輸出を行な

38) 同上，71ページ。
39) 同上，72ページ。
40) 同上，46ページ。
41) 同上，47ページ。
42) 同上，47-48ページ。
43) 同上，47ページ。
44) 同上，48ページ。
45) 同上，49ページ。

う以外」[46] はなく「独占支配の全産業部門を通じての完成は，その国における従来の若干産業部門の不均等発展に主導されての飛躍的な不均等発展の強力な傾向から，一転して各産業部門全体を通ずる重苦しく停滞的な発展傾向への」[46] 交替であるとして「帝国主義諸国相互間における『発展』と『停滞』との国別配分（並存）の法則」[47] を導かれる。

かくて古川氏は，資本蓄積と生産力発展の激しい不均等性（「発展」と「停滞」）に対応する関係のもとに，国内市場ではその「急激な膨張とそれの一定期間の持続の可能性……それと対極的に，ある時期には発展の停滞化のもとでの……重苦しい生産的消費・個人的消費双方にわたる重圧の持続……この二つがいわばより長期化された時期的交替として，相互に平均化されずに現われる」[48]，また世界市場ではその「統一性は破壊されて経済的支配領域も固定化され……多元的構成への傾向となり」[49]「資本輸出体系・特殊な関税体系等の新しい競争と支配の体系が採用され」[50] る，という特質をそれぞれ析出される。

②恐慌（循環）の形態変化について。まず㋑独占資本に特有な資本蓄積と生産力展開における「発展」・「停滞」なる「対極的な性格」[51] の「時期的配分・産業別配分・国別配分」[52] としての発現は，「活況・繁栄・恐慌・不況の斉一的で規則正しいくり返しではなく，発展と停滞の二極的傾向，飛躍と斜陽化の対抗を長期にわたる傾向として内包したうえでの景気の循環的曲折」[53]＝産業「循環各局面の継起性の欠落や特殊な長期化」[53] を不可避とする。また㈺独占支配による「生産力と消費力の矛盾の深化」[54] は「恒常的停滞化ないし常時の恐

46) 同上，50ページ。
47) 同上，51ページ。
48) 同上，54ページ。
49) 同上，56ページ，傍点—著者。
50) 同上，57ページ。
51) 同上，41ページ。
52) 同上，42ページ。
53) 同上，102ページ。
54) 同上，98ページ。

慌」[55]を意味しないが「循環周期の傾向的短縮化」[56]を帰結する。そして(ハ)帝国主義による世界経済・世界市場の「統一性の破壊」は，産業「循環の地域別分裂化と統一的世界市場恐慌爆発の阻害化」[57]を必然化する，とされる。こうした形態変化は更に歴史的・具体的に検証されているが，なお古川氏は「世界循環の斉一性の破壊，循環各局面の継起性の損傷，周期の長さの変動などを傾向的に激化あるいは明確化してゆくもの」[58]と見られる。

(2) 以上，要約的な引用ではあるが，古川氏はこのように恐慌（循環）の形態変化を，独占支配を基軸とする不均等発展の激化に画される特殊段階的な「運動基盤上」[59]に必然的なものとして捉えられている。かつて，レーニンは「個々の産業部門，ブルジョアジーの個々の層，個々の国は，帝国主義の時代に，程度の差はあるにしても，これらの傾向のうち(「発展」と「停滞」—引用者)，あるときは一方を，あるときは他方をあらわしている。」[60]と述べたが，氏はかかる不均等性の激化の内容を具体的に展開されたのである。言うまでもなく，現代恐慌（循環）の形態的特殊性は，例えばこれを産業資本主義段階の場合と無媒介的に比較したり，今次大戦前ならばすべて「古典的」形態と看做すことによっては捉ええない。氏の形態変化論は，すぐれた方法的視点に立脚したものである。だが，以下の如き若干の問題点が残されている。

まず，氏の強調する「景気の循環的曲折」に関して言えば，それは産業「循環各局面の継起性の欠落・特殊な長期化」を意味しているが，必ずしも充分に理論化されているとは言えない。確かに歴史的には，今世紀初頭—第1次大戦期における「相対的に長い不況をともなった相対的に微弱な恐慌と，相対的に

55) 同上，54ページ。
56) 同上，98ページ。
57) 同上，72ページ。
58) 同上，105ページ，傍点—引用者。
59) 同上，102ページ。
60) 「レーニン全集」第22巻，347ページ，なお，レーニンはこの引用文に明らかな如く，「慢性不況」や「慢性的停滞」をもって独占資本主義の支配的な「傾向」と看做してはいない。また，レーニンがこの文章の直前で帝国主義の「腐朽の傾向は資本主義の急速な発達を排除すると考えたら，誤りであろう。」(同，347ページ）と述べている点は重要である。

弱い高揚」[61]を示した循環的発展（イギリス・フランス型）や「各循環における急速な上昇とパニックをともなう激しい恐慌との交替，しかし，つねに恐慌も不況も短期でおわり，それにつづいては比較的長期の激しい活況」[62]を示した循環（アメリカ・ドイツ型），また就中1930年代の本来的な「循環性活況局面」を欠落した「特殊な循環過程」を指摘しうる。しかし，理論的規定としての「景気の循環的曲折」は，かなり曖昧な「概念」である。すなわち，独占的高利潤の獲得をめざしての独占資本相互の激烈な設備投資競争に主導された部門内・外におよぶ資本蓄積・生産力展開の飛躍的発展の傾向は，それと対極的な停滞的傾向と必然的に交替せざるをえないとは言え，こうした「不均等発展の法則」のいわば長期的な「対極的作用」に包摂される産業循環過程の特殊性が理論的に析出されぬまま「景気の循環的曲折」として一括されてしまい，資本主義の基本矛盾の展開過程に「重層的」に加わる「競争と独占の矛盾」に由来する恐慌（循環）の「多様な典型」[63]が浮き彫りになっていないように思われる。そのために「景気の循環的曲折」＝形態変化は，内容的には産業循環の局面交替・推移の「不明瞭化」以上を意味しえず，ややもすれば独占的資本蓄積の特質たる「発展」と「停滞」なる「不均等発展の運動」形態そのものとの区別さえ困難となっている。だが，この問題は「循環周期の傾向的短縮化」の定式化とも関連していよう。

古川氏は，独占段階では「生産力発展の飛躍性からも，個人的消費の狭隘性からも，世界市場進出の困難性からも，生産と消費の本来的矛盾の深化とその頻繁な衝突爆発の必然を論定しなければならない」[64]と主張され，また循環運動の「物質的基礎」を成す「固定資本の特殊な回転様式」に関しても，その「物理的耐久力の長期化」に対する「社会的磨損の加速化」・「建設期間の短縮化」を指摘[64]する。しかし，独占支配に伴う「生産と消費の矛盾」の深化や固

61）古川哲，前掲書，109ページ。
62）同上，74ページ。
63）同上，81ページ。
64）同上，95ページ。

定資本の「回転期間の短縮化」を指摘するだけでは，循環周期の「短縮化」＝恐慌の「頻繁化」は解きえまい。やはり問題は，かかる矛盾が「発展」・「停滞」なる独占的資本蓄積過程の時期的特質交替のもとで如何に周期的恐慌の「頻繁化」を惹起するのかである。もとより資本制生産の無恐慌的発展その反対に絶対的停滞化・慢性的恐慌を言うことは正しくない。だが不均等発展激化のもとで，すなわち一定期間持続する「飛躍的発展期」＝高度成長期と言えども全般的過剰生産恐慌の露呈化を回避出来ない点，また独占的投資競争の一段落した「重苦しい停滞期」＝低成長期においても「長期化した不況局面」は不可避的に次の「活況局面」と交替せざるをえない点，が立ち入って究明される必要があろう。またこの課題は，当然にも固定資本の回転の問題と不可分に結び付いているのであって，如何なる条件下で固定資本の「社会的磨損の加速化」が生じるのか，更に産業資本主義段階に特徴的であった固定資本更新投資の「集中性」は「競争と独占の矛盾」にどのように規定されるのか，などの諸論点が明らかにされるべきかと思われる。

次に，古川氏の「世界恐慌の分裂化」説について見るならば，それは帝国主義の資本輸出・保護関税体系，貿易統制等を手段とする独占的市場分割競争による世界経済・世界市場の「統一性の破壊」に極めて安易に結び付けられているように考えられる。このため，歴史的には第1次大戦前あるいは1920年代の世界循環・恐慌の統一的展開も「多様な典型」の一つとしてではなく結局は例外的に取り扱われてしまい，前者は主に国際金本位制による世界経済の「緊密化してゆく諸関係」[65]から，後者の場合は再建金本位制下の「アメリカの国内循環の投影」[66]なる側面から説明されるに留まっている。しかし，帝国主義段階における国際的な通貨信用関係や外国貿易，資本輸出関係に媒介された世界経済・世界市場の統一性＝有機的関連性の「維持」あるいは（戦後の）「回復」の意義は軽視すべきではない。むしろ，不均等発展の（国別配分の）激化のもと

65) 同上，113ページ。
66) 同上，135ページ。

に進展してゆく帝国主義諸国間の一定の平準化過程において，各国の自立的再生産運動＝産業循環は，言わば相対的独自性を保持しつつも相互に絡み合い統一的世界循環を（決して「瞬過的性格」においてではなく）必然的に合成してゆくものとして捉えるべきであろう。かかる視点に立ってこそ，特定国循環・恐慌の国際的「投影」＝波及の側面も，また統一的世界循環の合法則的な展開過程における恐慌（循環）局面のいわゆる世界的「非同時性」も単なる世界恐慌（循環）の「分裂性」と峻別されて，より明確に位置づけられうるのではなかろうか。

以上，古川氏の形態変化論に若干の疑問点を提示して来た。だが氏は，なお「不均等発展基盤上での運動の展開という新しい条件は，運動に内在する矛盾の累積とそれのいちおうの解決の形式にも新しいものをつけ加えた」[67]として，更に新たな「体制解体＝危機循環」という「概念」を構築される。こうした「概念」構成は，「競争原理」の「形骸化」から形態変化の激化を説く議論と対応しており，実はこの点にこそ古川理論の最大の特色が存している。節を改めて検討してゆく。

IV 「体制解体＝危機循環」説について

(1) はじめに「体制解体＝危機循環」（以下，「危機循環」と略す場合もある）についての説明を見ておこう。古川氏は言われる。すなわち，

> 独占段階では「経済的諸関係内での均衡のいちおうの達成をなしとげるメカニズムはもはや全面的に作用しえなくなり，経済的不均衡の均衡化が不完全なものにとどまり，この矛盾が爾後の循環局面の推移のなかに矛盾をもちこしてゆく……こうして，経済発展過程中に累積する矛盾は循環的矛盾（「経済的矛盾」＝恐慌にその解決を見出す矛盾」[68]—引用者）から構造的矛盾（「政治的・軍事的矛盾」＝「戦争に解決を見出す矛盾」—同前）に転成し，その結果，経済諸関係内で解決しえず，一循環内で解決しえない矛盾の運動が政治的諸関係の場もふくめた別個の爆発と解決の様式を求めて

67) 同上，102ページ。
68) 同上，22ページ。

自らを展開してゆく。そうした矛盾の新しい展開様式と，そのために発生する別個の新しい矛盾の特質を集中的に表現するものは，帝国主義段階に特有な帝国主義的侵奪と支配領域再分割のための戦争であり，またその戦争を準備し必然化してゆく政治的・経済的諸過程のすべてで」[69]ある。「こうしたこの構造的矛盾の展開といちおうの解決の新しい様式を総括する範疇として『体制解体＝危機循環』なる概念を用い」[70]る。

しかし，この「概念」は「限定された意味をもってのみ使用されるべきであり，体制解体（資本主義の体制的危機）の段階的深化を媒介せずにはおかないような矛盾の集中的露呈が不可避的に発生することの基礎構造を独占資本主義（帝国主義）段階において新たに把握しなおすための概念の設定であり，したがってそれは，次第に体制解体＝危機の循環的形態から恒常的形態への進展を展望しながらも，なおそうした段階的進化の各段階の内部に矛盾の集中的露呈にいたるまでの過程における一定の曲折を把握し，またその曲折に法則性を見出そうとすることを試みるための概念である」[71]と。

以上の如く「体制解体＝危機循環」説は，独占段階での経済恐慌の矛盾解決機能の「不完全化」を原因に「必然化」すると見られる帝国主義世界戦争の「循環性」を展開軸として成り立っている。かくて「危機循環」は，「全般的危機論の見地」とも結び付き，この段階に特有な資本主義的諸矛盾の法則的展開を総括する極めて包括的な「概念」となっている。

(2) さて，帝国主義段階においては，資本主義の諸矛盾の「現実的総括」・「暴力的調整」を成すものは「世界市場恐慌」に代位する「帝国主義世界戦争」であり，恐慌と戦争は歴史的に並存しながらも「『恐慌』的諸形態は二次的な意義しかもちえな」[72]いと見ることは，この段階の本質的特徴を「競争と独占の矛盾」に求める見地に立脚した正当な認識である。

69) 同上，102ページ，傍点―引用者。
70) 同上，102-103ページ。
71) 同上，35ページ，傍点―引用者。
72) 同上，21ページ。

だが，資本主義の諸矛盾を「解決」する上で経済恐慌が「二次的」な地位に後退したからと言って，恐慌機能の「不完全化」をもって果して帝国主義戦争の「必然性」を説きえようか。古川氏の論拠の一つは，こうである。すなわち，独占的な領土分割を完了した独占段階では「世界市場の相互侵奪＝市場再分割の闘争が激化し，まったく新しい独自の内訌が展開する。もはやそこでは，不均等発展の結果としての急激な膨張と新旧の交代は，拡大された均衡化へとなだらかに吸収されてゆく可能性を喪失し，一方の膨脹は他方の衰退を，一方の進出・勝利は他方の打撃・敗北を直接的に結果する以外には均衡を一時的にも生みだすことができない。」[73]のであって，帝国主義諸国相互における「好況の共通の蓄積への傾向が失われ，通常の恐慌によっては吸収しつくせないような構造的不均衡がねづよく残される。」[74]と。確かに，帝国主義戦争の不可避性は，不均等発展の激化に伴う帝国主義諸国間の「構造的不均衡」の累積に基づく。しかし，かかる「不均衡」の発展を殊更に恐慌によっては「吸収しつくせぬ」矛盾の累積と看做す訳にはゆかない。何故なら，こうした立論は，市場再分割闘争を惹起する「一方における生産力の発展および資本の蓄積と，他方における植民地および金融資本の『勢力範囲』の分割とのあいだの不均衡」[75]を，言わば恐慌的に解決される「生産と消費（市場）の矛盾」に単純化し還元することに等しいからである。これでは，帝国主義に固有な独占と金融資本の支配および世界の領土的分割の完了という歴史的特質を閑却することになりかねず，また逆に言えば，前独占資本主義段階において，世界市場の外延的拡張にも拘わらず何故に世界市場恐慌の集中的爆発を不可避としたかが却って理解されえなくなろう。

もう一つの論拠は，必ずしも明示的な説明ではないが，独占段階では「固定資本の巨大な集積と独占の形成によって自由な価格変動が阻止され，その結果，

73) 同上，69ページ，傍点—著者。
74) 同上，70ページ。
75) 「レーニン全集」第22巻，318ページ。

資本蓄積の増減と資本価値の破壊による過剰な資本と生産力の切捨てが徹底的に行なわれなくなり，過剰な生産力の温存が行なわれる」[76] という点におかれている。こうした見解は，1929年世界恐慌の深刻性や国家独占資本主義の成立の必然性を説く際に，しばしば多くの論者によって持ち出されるものである[77]。勿論このような恐慌機能の「不完全性」自体は，抽象的には認められうる。すなわち，独占資本は，過剰生産恐慌期には「恐慌対策」として生産制限の一層の強化をはかり，独占的高価格の急落に抵抗しつつ，恐慌に伴う損失を非独占・大衆諸階層へ押しつけ，自己の陳腐化した生産設備を出来る限り温存しようとする傾向をもっており，従って「より大きな社会的規模で，経営設備の……時ならぬ更新を強要する」[78] 恐慌の「不徹底」な矛盾解決は，自由競争を基調＝唯一の「原理」とした産業資本主義段階における場合と対比すれば，決して否定することは出来ない。独占段階では，恐慌期における突然の集中的な「資本価値の破壊」＝「過剰資本」の一挙的解消の発現は，まさに「独占原理」（独占体の原料資源独占，市場独占と独占価格の設定，重工業部門の強大化＝巨額の固定資本投下，金融資本の形成＝信用供給の強化等）の支配をうけ，多かれ少なかれ抑制されよう[79]。だが古川氏の如く，ここから更に「恐慌によっては発展における矛盾をいちおう全面的に解決しえないで，持ちこされてゆく構造的矛盾を戦争によって最終的に解決しようとする」[80] と論じることは妥当ではない。無論一般的には，独占支配の成立に伴う資本主義の諸矛盾の激化に起因する，膨大なる

76) 古川哲，前掲書，136ページ。

77) 独占価格の設定に「資本過剰」と「慢性不況」の原因を見出し国家独占資本主義の成立の不可避性を説明する議論のローザ主義的難点を鋭くついたものに，池上惇，国家独占資本主義と独占価格，「経済論叢」第104巻第1号，がある。

78) K. Marx, Das Kapital, II, *Werke*, Bd. 24, S. 171, 長谷部訳「資本論」第2部，河出版，130ページ。

79) 生産制限による独占価格の維持のため「資本の破壊」が「回避」されるとし，独占段階に「特有な恐慌の形態」＝「慢性不況」を主張する代表的な見解に，大内力「国家独占資本主義」1970年がある。しかし，独占価格による「資本破壊」の「回避」に着目するだけなら，独占段階の恐慌はすべて「慢性不況」として把握されざるをえまい。

80) 古川哲，前掲書，25ページ。

「資本の過剰」の形成を背景に，独占的金融資本の資本輸出（と商品輸出）が強行されつつ「矛盾の対外的な転嫁」（後進諸国へのしわ寄せ）が企図され，かくて帝国主義列強相互間の領土的分割・再分割のための闘争が異常に苛烈化するものと考えられる。しかしながら，恐慌によって全面的には処理され更新されない「過剰資本」と旧生産力が，たとえ「爾後の循環局面の推移」の中に残留してゆくとしても，帝国主義列強間の尖鋭的対立に集約される，諸矛盾の発展を「循環的矛盾」の「構造的矛盾」への「転成」としてのみ把握することは出来ないであろう。このように前者の後者への「転成」を説くならば，資本主義的再生産過程に内在する「生産と消費の矛盾」の本来的展開＝「経済的矛盾」の自立的な発展が看過され，それこそ資本主義の全般的危機のもとでの独占の再編成と競争要因の創出という戦後の資本主義の特質も見失なわれると思われる。

以上，「独占原理」の作用による恐慌機能の段階的な質的変容を前提として，帝国主義戦争に帰結する資本主義の諸矛盾の発展を理解することは首肯しえない。独占段階に固有な「競争と独占の矛盾」に規定されて激化する個々の企業・産業部門・国家相互間の対立は，もともと恐慌（「経済的自己調整」）による解決の不可能な矛盾（構造的な）として幾つかの産業循環過程の交替を包摂する長期的な「不均等発展」となって運動するが故に，一面で恐慌（循環）の変容をもたらしながら基本的には帝国主義戦争を不可避ならしめてゆく，と考えられるのではなかろうか。

ところで，更に「体制解体＝危機循環」の概念規定に関して，次の如き疑問点が生じる。すなわち，「危機循環」なる「概念」が資本主義の全般的危機の「循環性」を含意している点についてである。実際この点に，「独占＝帝国主義段階の経済循環理論」を「循環論」に「危機論」を合成することで「独占の支配が進展すればするほど，ますます『体制危機論』として」把捉する古川理論の独自な方法的観点が端的に表明されているが，それは次のような全般的危機の理論規定に基づいている。古川氏は，資本主義が「過剰と不均衡を恐慌という経済運動の内部で資本家的にすなわち経済内部的に十分に自己克服するこ

とができるかぎりは，その体制はけっして体制そのものの全般的危機におちいったとはいえない。」[81] との規定の上に，帝国主義（世界）「戦争循環」[82] の別様の表現たる「体制解体＝危機循環」[83] は，繰り返される帝国主義戦争とそれに伴う「独占原理」の支配の強化を契機に全般的危機の「段階的な深化」を媒介するのであり，かくて全般的危機も「循環的形態」をとって現われながらも「恒常的形態」へと進展してゆく，と主張される。だが，こうした危機規定および論理的構成によるならば，全般的危機の尖鋭化は，資本主義に本来的な恐慌を決定的局面とする産業循環の消失化と同義にならざるをえない。かかる視角からは，歴史的な危機深化のもとでの独占による産業再編成・近代化，「生産のための生産」＝設備投資の盛行，従って過剰生産恐慌要因の成熟過程を解くことは極めて困難となろう。古川氏は言われる。全般的危機の第1段階は，世界循環・恐慌の統一的展開を見た古典的帝国主義段階と異なり「かつて資本主義の生命循環であった経済循環がなんらかの自立的展開を示しえた最後の段階であった」[84] のであり，またその第2段階においては「体制危機の展開が経済の発展運動の性格と形態を根本的にかつ恒常的に規定する基盤となり，資本主義の発展における循環的曲折は死滅期における生存の痕跡」[85] にすぎなくなった，ここでは資本主義と社会主義との「二つの世界体制の対抗と闘争をその基本条件として，資本主義世界の運動の根本性格が，資本の経済的論理（価値

81) 同上，171ページ。

82) 同上，25ページ，なお，古川氏は，産業循環過程における継起的局面交替になぞらえて「戦争」＝「暴力的均衡化」・「戦後局面＝いちおうの発展局面」・「新しい構造的矛盾の累積期」＝「戦争準備期」に区分されている。レーニンは「破壊された均衡をときどき回復する手段は，産業における恐慌と政治における戦争よりほかにはありえない。」（「レーニン全集」第21巻，351ページ）と論じたが，帝国主義戦争の「不可避性」を「循環性」に置き換えることも可能であろう。ただしこのレーニンの命題で留意されるべきは，あくまで「恐慌」と「戦争」が概念的に峻別されている点である。

83) 帝国主義戦争が「体制危機＝革命的危機」を生み出すように，自由競争段階においては世界市場恐慌は「社会変革を強制する手段」（エンゲルス）と見られた。だとすれば，「体制解体＝危機循環」なる「概念」は，客観的には「恐慌循環」をも包含しているのではないだろうか。

84) 古川哲，前掲書，200ページ。

85) 同上，142ページ。

・再生産の本来の法則と自己責任の原則上での自由な利潤追求）をその体制維持の政治・軍事の論理の枠内におしこめ，政治の主導と国家の介入によって経済の論理を恒常的に歪曲し編成替えしてゆき管理しつづけ」[86]「恐慌は体制の死滅期における『過渡的』恐慌現象にほかならな」[87] くなった，と。ここには，一方での全般的危機の深化と他方での恐慌（循環）の形態変化の激化という，両者の表裏一体的な進行が指摘されている。しかし，かかる歴史的評価においては，「戦争」と並んで資本主義の「体制解体」（死滅）をそれなりに促進する契機たる恐慌の「二次的」な意義もその歴史的な厳存もともに軽視ないし否定されている，と言わなければならないであろう。

結局のところ「体制解体＝危機循環」説は，客観的に見るならば，周期的恐慌および産業循環を否認してしまい，言わば帝国主義（世界）戦争を「決定的局面」とする全般的危機の「循環性」を説き，しかる後その「恒常化」を展望することで一種の「資本主義の自動崩壊」論に堕しているものの如く考えられる。「危機循環」説は，「危機論」を抜きに専ら「循環論」を説く議論に対し有力な批判的見地を打ち出したものと思われるが，逆に「循環論」を「危機論」に埋没させている点に，やはり一定の限界を有していると言えるのではないだろうか。

V おわりに

以上，われわれは古川氏の所説についてささやかな方法的検討を試みて来た。ここで以上の検討を踏まえ，今後の研究方向を設定して結びにかえたい。

古川氏は，独占段階の本質的特徴＝「競争と独占の矛盾」とこれに規定された独占的資本蓄積の特質解明の上に，恐慌（循環）の歴史的特殊性を全般的危機論の見地とも結び付けて捉える注目すべき視点を提示された。だが，畢竟するに「独占原理」の「競争原理」に対する「絶対的優位性」を強調し，資本主

86）同上，201ページ。
87）同上，142ページ。

義的再生産過程の内在的矛盾が「競争と独占の矛盾」に具体的に媒介されて蒙る恐慌（循環）の形態変化（＝「形骸化」）の激化を説き，更に「体制解体＝危機循環」のうちに恐慌の独自的な発現機構自体を解消された訳である。

従来から，独占段階の恐慌の典型を「慢性不況」としてのみ観念的に把握する論調は多い。しかし，専ら「慢性不況」や恐慌的矛盾解決機能の「構造的阻害」を説くならば，例えば，戸田慎太郎氏が鋭く指摘されている如く「国家独占資本主義を恐慌対策としてのみ把握すること」[88]になり，現代恐慌（循環）も単なる「景気後退」・「恐慌現象」（「景気循環＝政策的上下変動」）に矮小化されよう。だが「独占原理」は「競争原理」を排除しえない。自由競争段階と抽象的に対比し独占段階における「資本破壊」の「不徹底化」や資本主義の「内的発展起動力」の「自己喪失」を論証せんとする試みは，少なくとも一面的である。重要なのは，独占支配の発展が，他面で独占利潤の取得を動因とする独占的金融資本相互の原料資源の確保・販売市場の拡大をめぐる国内的・国際的な競争と闘争を激化させ，また財政・金融政策を中軸とする国家の経済過程への介入を強化せしめつつ資本主義の新たな経済発展を実現するが故に，却って階級的・民族的諸矛盾を尖鋭化し，資本主義の全般的・体制的危機を深めてゆくとする視点であると思われる。かかる視点に基づく独占段階における資本蓄積法則の究明こそ，筆者の今後の課題である。

88) 戸田慎太郎「現代資本主義論」1976年，まえがき，VIページ。同氏は，「積極的な生産拡大策，生産力拡大として国家独占資本主義をつかむこと」（同）「巨大独占の資本蓄積との関連で国家独占資本主義をとらえること」（同）の重要性を力説されている。